

令和5年3月1日発行 巻数/第76巻第3号(毎月1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

# 春燈

2023 March

3月号



# 安住敦の句

## 獅子舞のあるいは水の辺に憩ひ

『歴日抄』昭和四十年

獅子舞は昭和の風趣の一つといえよう。新年家々の門口で厄払いをし、祝儀袋を啜えて去って行く。『古暦』にも「獅子舞の笛のきこえてここへは来す」と詠んでおられる。数年後、どこか水辺で重い獅子頭を取り一服している汗の顔をみかけられたのだろう。先生はこれからも一行が元気でいてくれそうだとほっとされこの句が生まれたのではないだろうか。

江草 礼

## 安住敦の句

# 散りいそぐ花のあはれを隻眼に

『柿の木坂雑唱以後』平成二年

別な句の前書に「わが家に一本の桜の木あり」とある。  
この句はその桜の満開ではなく、落花に目を向けている。  
散りゆく花弁に宿る命のはかなさ、哀しさを「あはれ」と詠み、それを心に留めておきたいという。眼が不自由であられた師の気持と優しさが伝わってくる。  
同じ年に詠まれた「一片の落花といへど惜しまねば」と併せて鑑賞したい。

大文字孝一

名誉主宰 安立公彦

主宰 鈴木直充

春待つや日ごとの空の青さにも

だんまりの綿虫日暮連れ来り

心地好き山路の風や梅さぐる

停まるとき発つとき貨車の哭く寒さ

いつ晴れし庭木の滴春を呼ぶ

じきに止む雨と思ほゆる年の市

慎ましき和服の袖や初まうで

佳き声のまちがひ電話年つまる

淑気満つ富士の高嶺を波の上に

冬満月一樹一樹をねむらする



# 当 月 集

鈴木直充選



○ 西村洋平

逆光に小岩とまがふ鴨の陣

ちやんちやんこ後ろ姿は怒り肩

熱爛やくもり眼鏡を頭に上げて

黒檀の机真中に冬座敷

愚痴交はし床屋を出でぬ年の暮

○ 杉山乃ぶ子

定位置にまた鉄無き年の暮

曲乗りの帽子へ小銭空つ風

暦果つ日ごと箴言嘉言見て

一葉忌母の負けん気我に無く

テニスラリー続き山茶花零れつぐ

○ 米川喜美代

胎内のごとき舟屋や野水仙

短日や末尾を端折る置手紙

冬帽子予後のあなたによく似合ひ

枯蘆や根元に命たぎらせて

菊練りをする間霜焼忘れぬし

○ 秋山 葛

庭松のてつぺんに置く冬帽子

石垣の崩れ掛かるや冬苺

老ゆるとは美しきかな蓮の骨

当主老ゆ金粉浮ける屠蘇に酔ひ

鋤焼をしきる長子の箸さばき

○ 中島美冬

風花に擲揄はれたる古木かな

煙草屋の閉ぢて十年や町師走

禿頭を勞り隠す冬帽子

睦み合ふふくら雀に日の優し

年用意夫の割当少なめに

# 春燈の句

鈴木直充選

煮凝や貶し合うては老ふたり

三重 水谷 甚

長良川冬の岸べに鶉を馴らす

深雪して地藏詣りに出かねたる

鈴鹿嶺に雪置いてきし風なるか

極月や六年生の義士芝居

街中の山茶花こぼる義士祭

粕汁や妻の盗みし母の味

クリスマス丈夫な妻を賜りし

一茶忌や鍬の石噛む音を立て

歌会へ母の形見を重ね着て

切れ切れの戦の記憶十二月

数へ日や落日染むる里の山

熊笹の跳ね返る音や寒昂

山家閉づわが頭に肩に雪蛭

東京 若松 恭子

山へ放つ二匹の犬や枯木星

初曆懸けて山家を降りにけり

火の中の枯菊音を立てにけり

喪の家の白山茶花の散りやまず

ダンボール音立て潰す十二月

年の市荷物は夫にあづけをり

物指しは吾が片腕や一葉忌

綿虫というて失ふ夕べかな

鈍行の達磨ストーブするめ焼く

鱒鮓の仕込せはしや十二月

日本酒の落暉見下ろす懸大根

山裾に寄り添ふ浦戸鰯起し

狐火かはた提灯か闇深し

夫帰るまでに大根のすきとほる

東京 鈴木れい香



千葉 白井さゆり

東京 杉渕 良子